

《Research Note》

Peace Studies from the Perspective of Cosmopolitanism and Justice

Hideki Iwaki

Currently, there is division and exclusion all over the world. Therefore cosmopolitanism, which considers the world from a global viewpoint, is increasing in importance. Poverty and inequality are also increasing, so justice and fair distribution of wealth are necessary.

In this paper, I first explains the history of cosmopolitanism and attempt to bridge the gap between cosmopolitanism and communitarianism. I then examine the factors behind the rise of global justice and the current state of injustice in the world, pointing out problems of the poverty metaphor and the growing concept of justice.

This paper analyzes the problems of cosmopolitanism and justice, which have to date been rarely discussed in the field of peace studies, and explores the possibilities for a new peace studies framework.

コスモポリタニズムと正義の平和学

岩 木 秀 樹

はじめに

現在、世界中で内向き志向が強くなり、様々な局面で分断や排斥が見られる。このような状況だからこそ、民族や国家ではなく地球単位で世界を見るコスモポリタニズム（世界市民）が重要になっていくであろう。また貧困・格差も広がっており、様々な世界的諸問題を正義や富の公正な配分の観点から見ることも必要であろう。

本稿では、まずコスモポリタニズムの歴史を瞥見したうえで、それらをめぐる論争を考察し、コスモポリタニズムとコミュニタリアニズムの架橋を試み、将来の世界政府と非暴力の可能性を見ていく。次に、グローバル正義論が台頭している要因を考察し、世界の不正義の現状を見た上で、貧困に関する比喻の問題点を指摘し、拡大する正義概念を分析する。このように本稿では、今まで平和学では論じられる機会が少なかったコスモポリタニズムと正義の問題を中心に分析し、新しい平和学の可能性を展望する。

1. コスモポリタニズムの可能性

(1) コスモポリタニズムの定義と歴史

コスモポリタニズムとは、全ての人間がその民族的・国家的な帰属にかかわらず、人類というひとつの共同体に属する市民であるという考えであり、人を何よりもひとりの人間として扱う態度のことである（河野 2015:1）。

コスモポリタニズムは、人類共同体を理念として国民国家の排他性を克服しようとする道徳的コスモポリタニズムと、実際に国民国家を超えて人類共同体の法制化を目指す法制的コスモポリタニズムに分類できる(古賀 2014:2)。

コスモポリタニズムの用語の起源は大きく分けて、ソクラテス(B.C.384-322)とディオゲネス(B.C.412?-323)の二つの起源がある(伊藤 2018:83)。

エピクテトスによれば、「どの国の人かとたずねた人に対して、ソクラテスは、アテナイ人であるとか、コリントス人であるとかは決して言わずに『世界人(コスミオス)である』と答えた(アッリアノス『語録』第1巻9章1-2節)」とある(朴 2009:28)。シノペ(現在のトルコのシノップ)のディオゲネスは、どこの市民かと尋ねられ、世界市民と答えたとされる(ディオゲネス 1989:162)。

しかし、世界市民が積極的に語られるようになったのは、ヘレニズム時代であろう。ヘレニズム時代とは、前4世紀後半のアレクサンドロスの東征から、B.C.30年のローマによる地中海世界統一までの約300年である。ヘレニズム以前は、政治共同体の単位は城壁で囲まれたポリスであり、「人間はポリスの動物である」という言葉に明らかなように、ポリスこそが中心であった(古賀 2014:13.15)。ポリスにもコスモポリタニズムの萌芽はあったが、古代のポリスが衰退し、帝国が登場するヘレニズム時代にコスモポリタニズムは大きく花開いたのである。

コスモポリタニズムの概念は、ディオゲネスの弟子たち、およびその後のヘレニズム期から紀元後のローマ時代にかけて、ストア派の哲学者たちに受け継がれた(朴 2009:3)。ストア派のコスモポリタニズムがリアリティを持ったのは、ローマ帝国という実体があったからであり、単なる哲学的規範理論の帰結ではなかった。「ローマの平和」を実現し、征服した他国民に市民権を与えることにより、様々な民族や習慣を超えた世界市民を形成していったのである。その後の中世のコスモポリタニズムは、基本的にはキリスト教共同体のそれであり、非キリスト教徒、キリスト教の異端、イスラーム教徒には排他的であった(古賀 2014:27, 30)。

さらに近代になってカントによりコスモポリタニズムが彼の政治論・平和論

に組み入れられた(朴 2009:3)。カントのコスモポリタニズムでは、人権が尊重され、権力の分立が保障され、代議制によって運営されている政治体制を前提としている。またカントは世界政府ではなく、自由な諸国家連合を提案している(古賀 2014:53-54)¹⁾。

第一次大戦後のデモクラシーの進展や国際連盟の成立に刺激を受けて、両大戦間期は、法制的コスモポリタニズムが強くなった。最近の議論も、道徳的コスモポリタニズムのみならず、法制的コスモポリタニズムが盛んになっているが、目指すところは世界政府ではなく、世界政府なきグローバル・ガバナンスであり、ハーバース、ヘルド、ヌスバウムはこの立場に近い。またベイツやポグゲなどのように、グローバルな財の再分配にも議論が及んでいる(古賀 2014:57-60)。

このようにコスモポリタニズムは古代ギリシアで誕生し、民族や国家などの共同性を越える世界市民を目指すものであり、理念としての人類共同体を志向する道徳的コスモポリタニズムや具体的な人類共同体を作る法制的コスモポリタニズムがある。最近では、世界政府などの議論はあまりされず、世界的な貧困・格差を是正する富の再分配に焦点が当てられているのである。

(2) コスモポリタニズムの論争

コスモポリタニズムは、道徳そのものは普遍的であり、人種、ジェンダー、能力などに関わらず、あらゆる人を平等に処遇すべきだとの倫理的主張である(Shapcott 2010=2012:9)。

ポグゲによれば、どのコスモポリタニズムも以下の三つの要素を共有している。第一は、国家や集団ではなく個人を究極的関心とする個人主義である。第二は、その個人には世界中の誰もが包含されるという意味での普遍性である。第三は、こうした個人は誰にとっても究極的関心の対象と見なされるという一般性である(Pogge 2008=2010:265-266, 神島 2018:190, 上原 2011:75)。

このようなコスモポリタニズムに対して、様々なアンチ・コスモポリタニズムが存在する。古賀はこのことに関して、アンチ・コスモポリタニズムを四つ

に分類し、アンチ・コスモポリタニズムの主張を誤解として批判を加えている(古賀 2014:2-5)。

第一に、コスモポリタニズムが具体的な地域や民族といった特殊なものに対する帰属感を否定するので、ユートピア的で非現実的であるとの批判である。アンチ・コスモポリタニズムは、人類はそれぞれ固有の基準を有する別々の共同体の集合として理解すべきであり、共通の道徳など存在しないと主張する(Shapcott 2010=2012:9)。これらの主張は、コミュニタリアンのものであり、道徳的基準はそれが生じた特定の集団にしかないとの「文脈主義者」的立場である(Shapcott 2010=2012:61)。

このように、コスモポリタニズムの現実的な問題として、家族や友人と同等に見ず知らずの人々にも特別な配慮ができるのかという課題が存在する。もちろん近い人への親密性を国家のみに還元して、戦争などへの動員をはかるのは論外であるが、万人に対する無差別の道徳的配慮を、人々に要求することはなかなか難しい側面があろう(萩原 2005:175)。

第二に、世界政府ないし世界国家を要請するという点でもコスモポリタニズムが批判の対象になる。さらにコスモポリタニズムと帝国主義を同一視するようなものもある(Shapcott 2010=2012:26)。

しかし、コスモポリタニズムは必ずしも世界政府を要請するものではなく、むしろ今日においてはそのような主張はほとんどない。世界政府は中央集権的・画一的になりやすいので、文化的・政治的な多様性を危険にさらすという見解はコスモポリタニストの間では自覚・共有されている。

第三に、コスモポリタニズムが持っている排他的機能を指摘する論者は多い。「人類」という普遍的概念が引き合いに出されることによって、コスモポリタニズムの敵が「人類の敵」として抹殺の対象にされかねないと主張する。過去のコスモポリタニストが前提としていた理性的で道徳的な人間という範疇から、女性や奴隷や非西欧の人々が排除されてこなかったか、「人類」という概念が排除の論理となっていなかったかを自省することは重要であろう。このような見方は多元主義であり、コスモポリタニズムの普遍主義に異を唱え、同

質性よりも多元性を尊重すべきであるとの主張である (Shapcott 2010=2012:80)。

さらにコスモポリタニズムの有するイデオロギー性も指摘できよう。コスモポリタンとは言うまでもなく、ギリシア語のコスモス (宇宙、秩序) とポリス (都市) を語源としている。したがってコスモポリタニズムとは西洋の宇宙論と結びつき、西洋の姿を映し出しているのではないかという疑念がある。またローカルなものを軽視し、「普遍的」なものへの従属を強いる可能性も場合によっては存在する (Tomlinson 1999=2000:319-327)。

しかし、「人類」といった普遍的な概念を否定し、民族や国家を絶対化するイデオロギーこそ、様々な殺戮や戦争を生み出したことも歴史的事実であろう。多元性を認めた上での、共通点や同一の諸問題を抽出する普遍性も重要であろう。その上で、西洋起源のコスモポリタニズムであるとの自覚や自省が必要であろう。

第四に、世界市民という場合、そこに権利や義務が伴うはずであるが、世界政府がない以上、世界市民という言葉自体がナンセンスではないかというコスモポリタニズムに対する批判がある。

しかし、今日の国際人権法やEUの基本権憲章の進展に見られるように、たとえ世界政府が存在しなかったとしても、共通の人間性に基礎を置く道徳的コスモポリタニズムは、世界市民に権利と義務を付与する法制的コスモポリタニズムへと発展する可能性を含んでいるのである。

(3) コミュニタリアニズムとコスモポリタニズムの架橋

コスモポリタニズムと対峙しているとされ、アンチ・コスモポリタニズムの代表格であるコミュニタリアニズムは、1980年代以来、サンデル、マッキンタイア、テイラーらによって提唱された。いわゆる「社会主義の衰退」以降、現代社会はリベラリズム一色になり、個人の自由と権利は善に先行するものとして、他者に危害を与えない限り無条件に正義と見なされるようになった。コミュニタリアニズムはこうした時代に異議を唱え、共同体の存在は個々人を支える不可欠の前提であるとする。市場と国家が深く社会を侵食している現実に

抗し、政治的にも経済的にも重要な領域としてコミュニティ（共同体）の再構築を唱えたのである（青木 2002:3）。

日本においては、コミュニタリアニズムはしばしば伝統的な共同体主義として保守主義と見なされることがあるが、コミュニティすべての成員の共通善を追求するものであり、自由主義と社会主義とは異なる第三の道を志向している側面もある（岩木 2008:142-143）。

しばしば、コミュニタリアニズムと国家の親近性が強調される場合があり、その側面は当然存在し、現在こそそれを乗り越えねばならないが、それとともにコミュニタリアニズムは国家を超えるもう一つの方途をも示しているのである。国家よりも下位の家族や地域などのコミュニティとのつながりを重視し、身近な共同体への愛着を持ち、社会の紐帯維持のための社会福祉を重視するのである。このようなコミュニタリアニズムの積極的側面を評価することも重要であろう。

このようにコミュニタリアニズムの主張は重要な側面もあるが、コスモポリタニズムが重要視する個人よりも、共同体に力を与える場合がコミュニタリアニズムにはある。集団に所属することが当然だからといって、集団の権利が個人の権利を上回り、個人を害することが歴史上非常に多かった（Shapcott 2010=2012:59, 98）。どちらの主張も重要な観点を包含しているので、今後はコミュニタリアニズムとコスモポリタニズムを排他的に捉えるのではなく、架橋する試みが待たれよう。

シャプコットによれば、人間は、生まれ落ちた共同体と人類共同体の双方に位置づけられているのである。したがって一方が他方に対して排他的であったり、道徳的責任をいずれか一方の共同体で使いはたしてしまったりしてはならない。つまりコスモポリタニズムというのは、友人や隣人に対する義務と、見知らぬ者や人類一般に対する義務とをバランスさせ、時には人類を最優先しなければならないという主張である（Shapcott 2010=2012:268）。

コミュニタリアニストのウォルツァーらは、隣人や市民に対する共感や愛着を持ちえない人間が、全人類を愛することができるのかと批判する。自分

の子供を愛しえない母親に全人類を愛しなさいと言っても無駄であろう。コミュニタリアニストは、身近な内側から他者の外側に対して愛のベクトルの円が書かれ、隣人意識や同胞意識が世界市民より先にあることを主張する（古賀 2014:338）。これらの主張も私たちの日常の意識や感情と符合するものであり、否定すべきではないであろう。

コスモポリタニストであるヌスバウムも、ストア派から愛の同心円のモデルを継承しながらも、血縁、地縁、国家などのアイデンティティを否定しなかったのである。ヌスバウムは次のように主張する。私たちは民族的なものであれ、性別に基づくものであれ、宗教的なものであれ、われわれの特別な愛情や一体感を放棄する必要はない。私たちはそれらを皮相なものと考えする必要はない。また私たちのアイデンティティは部分的にそれらによって構成されると考えてよい。私たちは教育においてそれらに特別の注意を払ってもよいし、また払うべきである。しかし私たちはまた、全ての人間を私たちの対話と関心の共同体に受け入れるように努めるべきである（Nussbaum 1996:9=2000:27-28、朴 2009:17）。

ポグゲも一概にナショナリズムを否定してはいない。彼はナショナリズムを、個別主義的ナショナリズムと普遍主義的ナショナリズムに区別し、後者を支持している。前者はネーションに対する忠誠のみを主張する排他主義的・人種差別的イデオロギーであるのに対して、後者はネーションに対する忠誠と世界市民主義との両立を可能とする普遍主義的ナショナリズムとしている（Pogge 2008:125=2010:196、古賀 2014:246）。

コスモポリタニズムは必ずしも地域や民族、国家へのアイデンティティを否定しているわけではなく、肯定するとともに超えていこうとしているのである。それと同時に、そうした帰属感やアイデンティティが排他的なものにならないように、行き過ぎを規制するものである。

このように、コミュニタリアニズムとコスモポリタニズムは二律背反的なものではない。特にコスモポリタニストは両者の架橋を試みていると言ってもよいであろう。同心円の内からか外からかのアプローチの違いはあるが、現実の

諸問題の解決に向けて、協力関係は構築できそうである。

(4) 世界政府と非暴力の可能性

コミュニタリアニズムとコスモポリタニズムの架橋が試みられているが、世界政府²⁾の議論は最近ほとんどされていない。第二次大戦後、核兵器の登場による人類の破滅を阻止するために世界政府樹立の機運が高まった(田畑1994:67)。だが現在、世界政府は夢想のように思われ、コスモポリタニストですらほとんど議論をしていない。近い将来の世界政府の樹立は不可能であろうが、主権の発動としての戦争の回避や国民国家を単位としたウェストファリア体制の相対化の観点から、世界政府の議論は有効であろう。排他的な線引き志向、内向きの排外主義を超克するために、少なくとも世界政府の方向性は間違っていないであろう。

世界政府の考え方は、世界全体を統治する単独の政府を形成することが望ましいとする立場である。これに対して、現在の多くのコスモポリタニストは、圧政のリスクを回避するため主権の分散化を主張している。各地域の文化的、経済的、政治的自律性を承認している点、単一の軍事組織を持たない点、一人のリーダーによる単一の組織は必要とはしない点で、世界政府は現在の国民国家政府の単なる拡大版ではないのである。統一的権力は核兵器を抑止するための集団安全保障という限定的な役割を持っているだけであり、また重層的な立憲システムを強調し、可能な限り権限を下位の共同体に移譲することが望ましいとコスモポリタニストは主張している(伊藤2017:154-161)。

世界政府は、現在の国民国家への軍事力の過度の集中を避ける狙いはあるが、非暴力を説いているわけではない。非暴力は、世界政府よりもさらに夢想だと捉えられているのが現状であろう。

だが非暴力にも、ジーン・シャープのような現実に立脚した非暴力主義も存在する。彼は非暴力闘争の方法として、次の二つを掲げる。第一は、敵のパワーの源泉を切断する方法であり、支配者への服従・協力を拒否することである。第二は、弱い者が強い者を倒す政治的柔術によるものであり、敵の残忍行

為により憤りが高まり、より多くの人々が非暴力抵抗運動に参加し、第三者の支援も増大し、強大な軍事力を持つ者に対して勝利を収めるのである。また非暴力的闘争の主体は、絶対平和主義者でも聖人でもある必要はなく、宗教的・倫理的である必要もないのである（中見 2009:166-172）。またシャープは、歴史を紐解き、軍事的交戦よりも政治的闘争の方が死傷者の数はずっと少ないことを指摘し、さらに具体的に198もの非暴力行動の方法を提示している（Sharp 2010=2012:65,i-xiii）。

近代政治学において、国家や個人の安全のため、また良き社会の創出と防衛のために殺人は不可欠であるとされている。だがグレン・ペイジにより、政治学の分野で「非殺人（nonkilling）」という言葉がタイトルに冠した最初の英文書籍が出版された（Paige 2009=2019:xvi）。これは、殺人は不可避であるとの従来の政治学を根本的に変革するものである。

非殺人社会とは、身近な共同体から始まり、地球的なレベルに至るまで殺人や殺人の脅威が存在しない人間の社会である。そこでは殺人用の武器は存在せず、殺人目的の職業も存在せず、武器使用の正当性も存在しない。社会維持や変革の名目での殺人や殺人の脅威がない社会である。このように人間社会においては、まず殺さないということが最低限の条件である（Paige 2009=2019: 1-2）。

このような政治学の前提を覆す主張を、幼稚な青臭い夢想であると、一笑に付すことができるだろうか。現在、紛争や暴力が蔓延し、分断や憎悪が世界に拡大している状況を改善する一つの方策となろう。また将来、この主張が当然であると考えられる可能性もあろうし、その歴史の流れを加速させる必要がある。そもそも彼は非殺人を夢想だとは思っておらず、非殺人社会の実現可能性を次のような七つの根拠に基づいて論じている（Paige 2009=2019:166）。

第一に、ほとんどの人間は人を殺さないという事実がある。第二に、人間の持つ非殺人の潜在能力は人類の精神的な遺産の中にある。第三に、科学は人間に非殺人能力があることを証明している。第四に、死刑廃止や良心的兵役拒否の制度化といった政策は、暴力的な国家によってさえ採用されている。第五に、実際に多くの社会団体が、非殺人社会の萌芽ともいべきものを持ってい

る。第六に、政治的・社会的・経済的な変革のための非暴力的な国民運動が、革命における殺人の有力な代替として力を増している。第七に、非殺人の希望と経験のルーツが、世界中の歴史的な伝統の中で発見されている。

2. グローバル化の中の正義

(1) グローバル正義論の台頭要因

現在、グローバル化に伴う時代の要請という実践的な背景のもと、グローバル正義論（グローバル・ジャスティス）が展開されている。例えば、テロや国際的な経済格差、民族紛争、破綻国家の存在、難民の発生、地球環境問題、金融危機、労働力の移動など、国境を越えて深刻な影響をもたらす問題が次々に発生している。正義を国家間関係に適用するだけでは、グローバル化に伴う諸問題に対して限界があり、国家単位の利害を出発点とする従来の支配的な思考様式から脱して地球規模での正しさに関する何らかの理解を打ち立てる必要があるとの認識が広まっている（石山 2013: 2-3）。

グローバル正義論の問題は、今まで、南北問題、ネオ・コロニアリズム、従属理論、世界システム論という枠組みで議論されてきたが、ポッゲらのコスモポリタニストは正義論の文脈で問題にした。グローバル正義論の問題は、特に現代のコスモポリタニストにとって特有な問題であり、過去のコスモポリタニストがあまり問題にしなかったものである。キケロやカントも戦争や平和に関する問題に取り組むことはあっても、国境を越えた財の再分配の提案は見られない。

グローバル正義論の問題を論じる際の大事なポイントは、第一に、配分的正義は、国内だけでなく、国際社会にも適用可能であるか。第二に、グローバル正義論は、国家間に関するものなのか、それとも個々人の境遇の改善に直結するものなのか。第三に、世界政府がない段階で、どのようにして配分的正義を実現していくのか。第四に、グローバル正義論の実現の義務が富める国にある場合、その根拠は何に求められるのかということである（古賀 2014:234）。

これらの問題は、前章のコスモポリタニズムの観点から論じられることが多

かった。しかし、現在のグローバル社会において、貧困・格差・テロなどの世界的諸問題が台頭しており、正義の観点からそれらを解決していこうとする動きも強まっている。

(2) 世界における不正義の現状

現在、世界中で貧困・格差などが大きな問題となっており、不正義がまかり通っている。

冷戦後の20年間に、餓死および貧困に直接関係する病気で亡くなった人はおよそ3億6000万人であり、その人数は、20世紀に起こった全ての紛争の犠牲者数よりも多いと推計されている (Duru=Bellat 2014=2017:13)。世界の貧困により、ナチスによるホロコーストのユダヤ人犠牲者600万人のほぼ3倍に達する貧困死の犠牲者が毎年生み出されている (井上 2012:220)。

現在の数字は多少良くなっているかもしれないが、地球には次のような人たちがいる。一日1ドル以下という最低の生活をしている人は地球人口の約2割、一日2ドル以下は地球人口の約半分である。ここ10年間で2億人近くの人が、貧困や飢えを原因として死んでいった。貧困を原因に死んでいく子どもは、1分間に約20人である。他方、地球上の豊かな2割の人々が、世界の肉と魚の45%を、総エネルギーの58%を、電話の74%を、紙の84%を、車両の87%を使っているのである (伊藤 2012:46-47)。

近年において、10億2000万人が慢性的な栄養不良状態にあり、8億4000万人が安全な水を手に入れられず、25億人が基本的な公衆衛生の便益を受けられず、9億2400万人が適切な住居を欠き、16億人が電力を使用できないと推定されている。また約20億人が必須医療品を得られず、約7億8100万人の大人が非識字者であり、2億1800万人の児童労働者がいるのである (Pogge 2008: 2=2010:24, 古賀 2014:233-234)。

国連の「ミレニアム開発目標」は、極度の貧困を2015年までに半減させるために、富裕国にその国内総所得 (GNI) の0.7%を貧困国に移転することを呼び掛けていた。0.7%で半減するのだとすれば、単純計算でも富裕国のGNI 2%

弱の移転で貧困は解消されることになる。富裕国の現在の生活水準を大幅に切り詰めることなく、目標は達成できるのである（伊藤 2010:41-42）³⁾。富裕の定義をポルトガルの平均所得、つまり平均年収2万5000ドルとして、この定義に当てはまる富裕層全員が200ドル寄付したら、貧困は解消されるという数字もある（Duru=Bellat 2014=2017:126）。

また命の格差も存在する。2008年のユニセフの調査によれば、最も子供が多数死ぬシエラレオネでは、生まれてきた子どもの1000人中270人が5歳の誕生日を迎える前に亡くなるのである。日本では、5歳の誕生日を迎えることができない子どもは4人である（伊藤 2010:41-42、11）。

これらの数字を見てもわかる通り、様々な不正義が世界中でまかり通っており、このような問題を具体的に解決しなくてはならないだろう。

（3）貧困に関する比喩の問題

このような貧困問題を解決するための比喩として、「救命ボート」の例がしばしば出される。私たちは定員60名の救命ボートに乗っている50人であり、このボートが水中で泳いでいる100人に会うというものである。選択肢として以下の3つが存在する。第一は100人全員をボートに乗せる。第二はボートの空き定員10人だけ救い上げる。第三は誰も乗船させないというものである。

伊藤によれば（伊藤 2010:47-49）、地球の現状はこのような「救命ボート」の状況とは異なる。2005年の数字であるが、地球では20億5700万トンの穀物が生産されている。年間一人当たり必要な穀物量を180キログラムとするならば、100億人以上を養える穀物が存在する計算になる。世界人口中約2割を占める富裕国住民が、世界の食糧の半分以上を消費している。しかも単に消費しているのではなく、多くを廃棄しているのである⁴⁾。

したがって、世界は「救命ボート」のような状況ではなく、次のような比喩が現実に近いのである。食料を満載し安全装置を完備した豪華客船が十分な乗船スペースを残しながら航海している。このような豪華客船数隻の周りには、中型船や小型船のみならずボートも航行している。さらに多くの人々が溺れか

かりながら泳いでいる。そして毎日5万人くらいの人が溺れ死んでいく。豪華客船からは時々周りに船や泳いでいる人に必要な物資が投げられる一方で、客船で毎晩行われるパーティーで余ったご馳走は海に廃棄される。このような状況はまさに不正義であろう。

シンガーも比喩を使い、以下のように主張する。富裕国の人々の義務は、池で溺れている幼児を助け出す義務と同じである。溺れている幼児の避けられる死を回避することに対して、私が救出活動によって被る、服が汚れる、他にやりたかったことのための時間が削られるなどの被害は、非常に小さいものであり、それは貧困者を救うことにも同じように当てはまるのである。すなわち、悪いことが起こるのを防ぐ力が私にはあり、それに匹敵するほど道徳的に重要な別のものを犠牲にしないですむのなら、私はそれを行うべきである (Singer 1993:229=1999:276)。シンガーは、キリスト教の聖職者の言葉を引きながら、貧しい人に何かを与える行為は、恵まれない人たちに分け与えているのではなく、その人のものをお返ししているだけだと主張する。全ての人たちのために与えられたものを、あなたが傲慢にも自分のものにしていただけなのである (Singer 2015=2015:41)。

現在豊かで恵まれている人は、他者から奪った人もしくはその末裔であり、豊かな人は本人の努力のみでそのような状態になったわけではない。生まれ落ちた先が劣悪な状況であり、本人の努力でどうすることもできない場合がある。それを運命という言葉で覆い隠すのではなく、改善する必要がある。豊かな社会に生まれ落ちた人々は、自らのライフスタイルを低下させることなく、大量廃棄等を改め、配分をきちんとやれば、多くの人々を救える可能性がある。

(4) 拡大する正義概念

現在の富裕国における大量生産・大量消費・大量廃棄を伴うグローバル・フードシステムにより、貧困国では食糧不足と栄養不足が死亡につながっているのに対して、富裕国では、食べ過ぎ、運動不足が死亡につながっている。こ

のように現在のグローバル・フードシステムは、貧困国のみならず富裕国の人々を不幸にするシステムとなっている（伊藤 2014:179）。このシステムは、さらに動物に対する不正義の問題へと発展している。

人類史において、正義概念の適用は次第に拡大してきた。西欧から非西欧へ、男性から女性へ、健常者から障害者、LGBTへと、正義を伴った人権意識が広がってきている。現在は人権意識だけでなく、動物の権利やアニマル・ウェルフェアまで視野に入るようになってきた。

2012年にアメリカでペットとして飼われている犬と猫の数は1億6400万匹で、アメリカで毎年殺される畜産動物は91億頭に及ぶ。世界中では今日、羊が10億頭、豚が10億頭、牛が10億頭以上、鶏が250億羽以上いる。

食肉農場の子牛は誕生直後に母親から引き離され、自分の体とさほど変わらない小さな檻に閉じ込められる。そこで、檻から出ることも、他の子牛と遊ぶことも、歩くことも許されず、平均4か月の一生を送る。すべては、筋肉が強くならずに、柔らかくて肉汁たっぷりのステーキになるためである。子牛が初めて歩き、筋肉を伸ばし、他の子牛たちに触れる機会を与えられるのは、食肉処理場へと向かうときである。

さらにこれらの畜産動物は、食肉処理場へ行く前に、毎年数億頭が苦しみながら命を落とす。養鶏場のゲージの中で、ストレスにさらされ、攻撃的になった仲間に突かれて死んでしまう鶏もいれば、あまりに早く成長させられたために、身体を足で支えられなくなったブロイラーチキンもおり、餌に近づくことができず、飢えと渇きで死んでいくのである。また生まれてからずっとゲージの中にいた豚や牛や七面鳥や鶏が輸送車に詰め込まれ、輸送のストレスで死んでいく場合もある。同じ種ではないからといって人間以外の生き物の権利や利益を軽んじるのは種差別であり、人種差別や性差別が間違っているように、種差別も重大な問題である（Harari 2011=2016上:123-126, Singer 2015=2015:173-176）。

さらに将来的には、動物ばかりでなく、植物や無機物、さらには地球外生命にまでこの範囲は広がるかもしれない。宇宙の歴史から見れば、全てのものは、宇宙のチリやガスから生じたものであり、根源的には同じ宇宙に存在する

兄弟であろう。近年、正義が国家内部で妥当する国家主義と地球全体に及ぶ地球主義、さらには宇宙にまで及ぶという宇宙主義が提起されるようになってきている。宇宙主義とは、宇宙に存在するすべてが道徳的関心の究極単位であるという主張である（瀧川 2014:85-86）。

現在、ペットなどに対して動物愛護法などで保護されているが、さらに畜産動物に対しても目を向けられつつある。人間から動物、植物、無機物さらに宇宙へと正義や平等の視座は拡大している。同じ宇宙に存在する同胞意識が作られつつあるのである。

おわりに

これまでの平和学では、紛争などの現実的諸問題が中心に論じられ、コスモポリタニズムの論争などの倫理的側面が考察される機会は少なかった。また紛争問題が中心であるがゆえに、生活に密着した貧困・格差の問題もそれほど扱われなかった。今後、平和学は、政治集団による暴力的戦いのみを扱うのではなく、戦争の原因としての貧困・格差の問題も視野に入れ、生活や思想的側面をも包含した研究をするべきであろう。現在、世界中で分断や憎悪、貧困や格差が増大し、大きな問題となっているので、このような観点から平和学を考察していくことも必要であろう。

コスモポリタニズムとコミュニタリアニズムは、互いに二律背反的なものではなく、両者を架橋する試みがなされており、現実の諸問題の解決に両者の協力は不可欠であろう。世界政府の議論は近年ほとんどなされていないが、主権国家のもたらす暴力、排他的な線引き志向、貧困・格差の増大による他者に対する排外主義が大きな問題になっている現在、世界政府への道のりや非暴力主義の有効性を少なくとも議論することは必要であろう。

また貧困・格差などの正義の問題が注目されており、紛争やテロなどの問題を解決するためにも、再分配機能を強化し、私たちの大量生産・大量消費・大量廃棄社会をもう一度反省すべきであろう。さらに正義概念は人類史において拡大してきており、西欧から非西欧へ、男性から女性へ、健常者から障害者

へ、人間から動物・植物・無機物・地球外生命へ、と広がっていくことであろう。まだかなり遠い将来になるかもしれないが、これらの志向性が当たり前の時代となることを期待したい。

今後、普遍の名による個別の排除でもなく、共同体の同胞のみを優先するのでもない新しい思考様式が必要であろう（押村 2010:118）。グローバリズムとローカリズムを足したグローカリズムと同様に、コスモポリタニズムとコミュニタリアニズムを複合したコスモコミュニズム（宇宙共同主義）の誕生が待たれる。それは、宇宙的視野のコスモポリタニズムと、国家や主権概念に収斂されないコミュニタリアニズムを基礎に置き、自律した個と市民社会などの中間集団と世界さらには宇宙的視野を見据えたこれら三者が、国家を超えて協同し結びつくものであろう。さらに、手段としては非暴力を念頭に置き、将来的には世界政府を志向することが期待されよう。

注

- 1) ただし、寺田によれば、カントは世界共和国（世界政府）を退け諸国家連合を採ったが、それは、世界共和国を原理的・理論的に否定したからではなく、現実的・実践的な理由から、さし当たり諸国家連合を樹立すべきだと考えたからであった（寺田 2019:78）。
- 2) 世界政府、世界連邦、国家連合など様々なレベルの統合形態はあるが、ここでは細かな議論はしない。
- 3) なお、深刻な貧困の中にいる全ての人々の不足分の合計は、年5000億ドルである。また高所得国の消費支出の42分の1を貧困国へと移し与えるだけで、深刻な貧困から逃れるために追加的に必要となる約5000億ドルの年間消費を提供できる（Pogge 2008=2010:33,25）。さらに620億ドルで、毎年貧困が原因で死亡する800万人の人々を救うことができるのである（古賀 2014:244）。ちなみに毎年の世界の軍事費の合計は約1兆2000億ドルであり、租税を回避してタックス・ヘイブンに毎年9000億ドルほどが流れ込んでいる（Duru=Bellat 2014=2017:108）。これらの金額の一部を貧困に振り向けるだけで、多くの問題を解決できよう。
- 4) 2015年における日本での食品廃棄は年間646万トンであり、一人当たりお茶碗一杯のご飯を毎日捨てている計算になる。国連食糧農業機関によると、世界では生産された食料の3分の1に当たる13億トンが毎年廃棄される一方で、9人に1人が栄養不足に苦しんでいる。また日本において年間10億枚の新品の服が一度も袖

を通すことなく廃棄されており、日本で供給されている服の4枚に1枚は新品のまま捨てられている(仲村 2019:191-192,32)。

参考文献

- Duru=Bellat, Marie, 2014, *Pour une Planete Equitable L'urgence d'une Justice Globale*, Editions du Seuil et la Republique des Idees, (=2017, 林昌宏訳『世界正義の時代 格差削減をあきらめない』吉田書店。)
- Harari, Yuval Noah, 2011, *Sapiens: A Brief History of Humankind*, Vintage. (=2016, 柴田裕之訳『サピエンス全史』上下、河出書房新社。)
- Nussbaum, Martha, 1996, *For Love of Country: Debating the Patriotism*, (=2000, 辰巳伸知他訳『国を愛するという事』人文書院。)
- Paige, Glenn, 2009, *Nonkilling Global Political Science*, (=2019, 酒井英一監訳『殺戮なきグローバル政治学』ミネルヴァ書房。)
- Pogge, Thomas, 2008, *World Poverty and Human Rights*, 2nd Edition, Polity Press, (=2010, 立岩真也監訳『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか—世界的貧困と人権』生活書院。)
- Shapcott, Richard, 2010, *International Ethics*, Polity Press, (=2012, 松井康浩他訳『国際倫理学』岩波書店。)
- Sharp, Gene, 2010, *From Dictatorship to Democracy: A Conceptual Framework for Liberation*, The Albert Einstein Institution, (=2012, 瀧口範子訳『独裁体制から民主主義へ 権力に対抗するための教科書』筑摩書房。)
- Singer, Peter, 1993, *Practical Ethics*, 2nd Edition, Cambridge University Press, (=1999, 山内友三郎他監訳『実践の倫理 新版』昭和堂。)
- Singer, Peter, 2015, *The Most Good You Can Do*, Yale University, (=2015, 関美和訳『あなたが世界のためにできるたったひとつのこと 〈効果的な利他主義の〉のすすめ』NHK 出版。)
- Tomlinson, John, 1999, *Globalization and Culture*, Polity Press, (=2000, 片岡信訳『グローバルバージョン—文化帝国主義を超えて』青土社。)
- 青木孝平、2002、『コミュニタリアニズムへ 家族・私的所有・国家の社会哲学』社会評論社。
- 石山文彦、2013、「『国境を越える正義—その原理と制度—』について」日本法哲学会編『国境を越える正義—その原理と制度— 法哲学年報2012』有斐閣。
- 伊藤貴雄、2018、「コスモポリタニズムとは何か」山岡政紀他編『ヒューマニティーズの復興をめざして』勁草書房。
- 伊藤恭彦、2010、『貧困の放置は罪なのか グローバルな正義とコスモポリタニズム』

人文書院。

伊藤恭彦、2012、『さもしい人間 正義をさがす哲学』新潮社。

伊藤恭彦、2014、『「食」とグローバルな正義』宇佐美誠編『グローバルな正義』勁草書房。

伊藤恭彦、2017、「グローバリゼーションと政府—世界政府とグローバル・ガバナンス—」菊池理夫他編『政府の政治理論—思想と実践』晃洋書房。

井上達夫、2012、『世界正義論』筑摩書房。

岩木秀樹、2008、「グローバル化による貧困問題と新しい共同（コモン）の可能性」『地球宇宙平和研究所所報』第3号、地球宇宙平和研究所。

上原賢司、2011、「グローバル・ジャスティス論 国境を越える分配的正義」小田川大典他編『国際政治哲学』ナカニシヤ出版。

押村高、2010、『国際政治思想 生存・秩序・正義』勁草書房。

神島裕子、2018、『正義とは何か 現代政治哲学の6つの視点』中央公論新社。

河野哲也、2015、「コスモポリタニズムとその敵—政治と形而上学」『哲学論叢』42号、京都大学哲学論叢刊行会。

古賀敬太、2014、『コスモポリタニズムの挑戦—その思想史的考察』風行社。

瀧川裕英、2014、「正義の宇宙主義から見た地球の正義」宇佐美誠編『グローバルな正義』勁草書房。

ディオゲネス、エルティオス（=1989、加来彰俊訳『ギリシア哲学者列伝（中）』岩波書店。）

田畑茂二郎、1994、「世界政府論の提起するもの」『世界法年報』第14号、Japanese Association of World Law。

寺田俊郎、2019、『どうすれば戦争はなくなるのか カント「永遠平和のために」を読み直す』現代書館。

中見真理、2009、「ジーン・シャープの戦略的非暴力論」『清泉女子大学紀要』第57号、清泉女子大学。

仲村和代他、2019、『大量廃棄社会 アパレルとコンビニの不都合な真実』光文社。

萩原能久編、2005、『ポスト・ウォー・シティズンシップの構想力』慶應義塾大学出版会。

朴一功、2009、「世界市民思想をめぐって」『大谷学報』88（2）、大谷大学。

